

08, 11, 10

世界が尊敬した日本人(36)

## 初代ベンチャービジネスの真珠王・御木本幸吉

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

志摩国鳥羽(三重県)の神明湾の養殖場で、御木本幸吉(36歳)、うめ(29歳)夫婦は人工真珠の種を埋め込んだアコヤ貝を開けていた。

莫大な借金をつぎ込み「狂っている?」「大法螺吹きや!」と周囲から疎んじられながら、徒手空拳で真珠の人工養殖に取り組んできて、早や5年がたつ。

来る日も来る日も何百というアコヤ貝を開くが、一向に変化はない。明治 26 年(1893)7月11日、妻うめが相島(現在の真珠島)の養殖場でいつものように開けた貝の中にピンクに



輝くものがあった。

驚いたうめは大声で幸吉を呼んで確認すると、紛れもない半円形の 5ミリほどの真珠ができていた。人工真珠を世界で初めてできた瞬間である。

「その時歴史が動いた」風には言え、115年前のこの明治 26 年(1893)7月11日こそ、わが国ではじめて世界的なベンチャービジネスが誕生した歴史的な日なのである。

御木本幸吉は安政5年(1858)年1月に志摩国鳥羽(三重県)でうどん屋の長男で生まれた。

明治11年、21歳の時、当時、東海道はまだ鉄道が開通していないため、江戸時代と同じく徒歩で11日かけて上京し、文明開化の風が吹く東京、横浜の異人街など、2ヵ月間も商売の勉強と新知識の吸収に出かけた。

ここで、外国人たちがアワビや干魚、海産物などを高額で買いあさり、中でも天然真珠が世界の王侯貴族、金持ちに愛される女性の最高の装飾品であり、最高級の輸出品であることを知った。

商才に長けた幸吉は世界のビジネスに目を開くとともに、やり方次第で地元の海産物を世界的ブランドにできるとピンとひらめいた。

30歳で東大・箕作佳吉博士の指導を受けながら、全財産をつぎ込み、英虞湾の孤島に一家で移住して、真珠の養殖に取り組んだ。半円真珠の養殖成功に力を得て、さらに天然の真珠に近い真円真珠の開発に悪戦苦闘する。



赤潮、冷水の発生によって養殖貝が全滅するなどの大被害に何度も襲われながら、そのたびにさらに大借金と血のにじむような開発努力によって、真珠養殖の技術が最終的に完成したのは明治38年(1905)、幸吉48歳の時であった。

「資源もない」「金もない」「情報もない」「技術もない」ないないづくしの当時、御木本はモノづくりによって外貨を稼ぐ「貿易、技術立国」しか日本の生きる道はないことを見抜いて、独力で真珠養殖にチャレンジして、成功したのである。

明治38年、明治天皇が伊勢神宮に行幸した際に、「世界中の女の首を真珠でしめてご覧にいます」と大見得を切ったが、その通りミキモト・パール的大部分は海外に輸出され、大いに外貨を稼いだ。その意味では豊田佐吉と並ぶ独創的な発明王であり、日本人初の国際ビジネスマンであった。

御木本の独創性は

- ① 地方のハンディーを乗り越えて、三重県という片田舎の海産物を世界な高級ブランド、高価な輸出品に仕上げたという地域おこし、町おこしの典型的な成功事例である。
- ② 明治44年のロンドン支店を皮切りにパリ、ニューヨークに出店するなど海外販売網を築き、日本企業の海外進出のさきがけ的な存在となった。
- ③ 来日した世界のVIPがこぞって真珠島を訪れたが、御木本は大いに歓迎して、真珠と日本を大いに売り込んだPRの天才だった。
- ④ 異文化コミュニケーションの天才でもあり、外国人とのコミュニケーションにも抜群の才能を発揮した一などで、115年前のベンチャーの実践は今でも大変参考になる。

昭和2年(1926)2月、欧米視察旅行にでかけた御木本はニューヨークでエジソンと会見、「私はダイヤモンドと真珠だけはどうしてもできなかった。その真珠を発明されたことは世界の驚異です。おめでとう」と世界の発明王から絶賛され、当時 69 歳の御木本は大感激した。

もう1つ御木本の偉大さは、明治の経済人の中でも最も長寿であったことで、独自の健康法、食事法を実践して、96 歳8月という稀有の長寿を保ち、昭和 29 年 9 月にその生涯を終えた。